

## 実践研究論文

国語科教育における中国語教材導入の可能性と意義  
—中国語版『はらぺこあおむし』の授業実践を通して—

李 軍・石井明子

## 1 はじめに

今回の授業対象者は東京都立南多摩中等教育学校の中等2年生である。彼らが生まれた2003年度は、日本では約7,730万人がインターネットを利用しており、この数字は当時の人口のおよそ60.6%にあたる<sup>1</sup>。そして、同年のインターネットの世帯普及率は約88.1%<sup>2</sup>に達しており、ほとんどの学習者は生まれた時から高度な情報機器に囲まれ、いわゆるIT環境の中で生活し、成長したと推察できる。

大崎素史と矢島伸男は、2008年に文部科学省が行った「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」の結果を示し、「中学2年生でほぼ半数の45.9%」が所持している上に「携帯所持者のうち二割が一日にメールを50件以上やり取りする」点を指摘している。また、「携帯電話やインターネットに代表される非対面型コミュニケーションの広がり、生活の中で依存性が高まる一方、対面型コミュニケーションの機会を失わせている」と警鐘を鳴らしている。さらに、約13,000人の大学生・短大生の日本語基礎力を調べた小野博の調査結果を踏まえ、「親しい間柄で行われるやり取りに時間が奪われ、打ち込む文章の短文化や、丁寧な文章表現や語彙に関する熟慮がなされなくなった」ことを指摘している<sup>3</sup>。

このように、情報機器の普及や言語生活の変容は、今日の学習者の言語能力に少なからず影響を及ぼしている。日本語基礎力の不足やコミュニケーション能力の低下が懸念されている中、日本語の基礎力を向上させるような取り組みや対面型コミュニケーションを意識した学習活動が今後ますます必要となってくると言えよう。

## 2 国語科と外国語科との連携授業の構想と年間指導

2017年告示の中学校学習指導要領の「国語」の「第3」の1(8)においては、「言語能力の向上を図る観点から、外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。」と明記されている。一方、同「外国語」の「第2」の3(1)エでは「言語活動で扱う題材は(中

略) 国語科や音楽科(中略)など、他教科等で児童が学習したことを活用したり(中略)すること。」と記され、両科目ともに連携に関する記述がなされている。この点は新学習指導要領の特徴の一つである。

外国語科との連携を図る授業実践(以下、連携授業)に関しては、小学校英語教育の導入に伴い、2004年頃から活発化している。小森茂は国語教育と英語教育(「外国語活動」との関係について、「第一言語としての母国語を自覚的・相対的に運用できる言語能力(言語の器)が大きいほど、これに比例して英語等の他言語能力の習得・形成に関与する」という仮説を立てた上で、小学校国語科教材「スイミー」における「すばらしいもの」と「おもしろいもの」の違いを「自分の言葉を意識化・自覚化・相対化できることで、他言語である『wonderful』と『marvel』との違いや使い分けに活用したり応用したりできるのではないかと指摘している<sup>4</sup>。このように有意義な外国語活動を目指すために小学校国語科の学習内容と関連させた研究は少なくない。しかし、榎木貴之によると、高校における連携授業の先行実践は、メタ言語能力の育成を目標とした実践と、論理的思考力や表現力の育成を目指した実践とを合わせても、十数例しか存在しない<sup>5</sup>。

このような実態を踏まえ、今日的な課題としては、中学校以上の校種で扱う国語科と外国語科(主に英語科)の連携を図るべき点、一つの目的に基づいた単発的な実践で完結させるのではなく継続的に学習内容を深めていく実践を行うべき点、そして、それらの実践は対面型コミュニケーションをベースとした内容にするべき点を挙げることができる。

そこで、2017年度に中等2年国語科において、学期に一度のペースで継続的な連携授業を実施することにした。すべての連携授業は、5、6名の班をつくり、班ごとの話し合いや交流を中心に展開した。1学期には、メタ言語能力の育成を目的として『The giving tree』と『おおきな木』の比較を通じた日本語の特徴に気づかせる実践を行った。続いて2学期には、言語感覚や表現力の育成を目指し日本語俳句と英語俳句を比較したり、1学期の連携授業で気づいた日本語の特徴を踏まえつつ、5・7・5の日本語を考えさせたりする実践を行った<sup>6</sup>。

大山万容は、複言語主義<sup>7</sup>を踏まえ、個人の複言語・複文化能力を発達させることを意図し、様々な言語を扱う「言葉への目覚め活動」を実践している<sup>8</sup>。3学期では、大山の実践を参考にしつつ、中国語・英語・日本語を用いた連携授業を考案・実践した。なお、中国語を用いた理由としては、「SVO」という語順が英語と似ていること、表意文字である漢字が使われていること、日本語漢字に類似した漢字が存在していることを挙げるができるが、一番の理由は3学期の授業で漢文を扱うことになっており、学年末試験前の授業と連携授業の内容を繋げることを意図したからである。そのため、漢文学習の最初には日本語・英語・中国語の簡単な例文を比較した「国語総合」の参考書の一部を読ませたり<sup>9</sup>、漢詩学習の最後に中国語の朗読CDを流したりするなど、試験後の連携授業を意識した活動を盛り込んだ。

本稿では、この中国語・英語・日本語を用いた連携授業を中心に論述し、実践を通して国語教育における中国語教材導入の可能性と意義について考える。

### 3 中国語版『はらぺこあおむし』を用いた授業づくり

中国語・英語・日本語を用いた連携授業は、一年間の締め括りとして学年末試験後の2018年3月中旬に実施した。授業対象者である中等2年生4クラスの学習者<sup>10</sup>は、適性検査という論文試験を突破して入学した者たちで、多少学力差はあるものの基礎的な論理的思考力を持っている。また、学校が探究学習に力を入れていることもあり、多くの学習者はグループワークでの話し合いや発表には慣れている。

今回の授業では、2学期までに行った連携授業からさらに内容を発展させるべく、「言語感覚の活用」を目的に据えた。「言語感覚の活用」とは、大津由紀雄が提案した「ことばへの気づき」というメタ言語能力<sup>11</sup>の考え方に近いもので、本実践では、既習の母語の知識を初めて接する中国語に対しても活用していくことを指している。

#### 3-1 中国語版『はらぺこあおむし』の教材化

本実践に用いた教材は、アメリカの絵本作家エリック・カールが1969年に出版した幼児向け絵本『はらぺこあおむし』の中国語版『好餓的毛毛虫』（鄭明進訳、明天出版社、2008）（図1）である。約半世紀にわたって国や地域を越えて愛読されてきたこの絵本は60以上の言語に翻訳され、日本でも有名な絵本として広く知られている。

この絵本は、あおむしが食べた箇所には穴が開いており、子どもが指を入れても破れないように丈夫な厚紙で作られている、いわゆる仕掛け絵本である。ストーリーは、日曜日の朝に生まれたあおむしが果物やチョコレートケーキ、緑の葉っぱなどいろいろな物を食べながら成長し、食べ過ぎてお腹を壊したりもするが、やがてさなぎになり、美しい蝶へと変身する、というシンプルなお話である。

絵本『はらぺこあおむし』の中国語版『好餓的毛毛虫』を教材化した理由は次の三つである。

一つ目は、多くの学習者が幼少期にこの絵本を読んだことがあるので、中国語が分からなくても、絵や漢字を見ることで、ある程度意味を推測することができるからである。なお、さらに難易度を下げたため、授業では、絵本の中国語（簡体字）をできるだけ日本語漢字の字体に変換して用いた。本稿においても、便宜上中国語の漢字を日本語の字体で表記することにする。

二つ目は、原作の英語版があるからである。中国語を日本語に翻訳する学習活動の後に、英語版を通して訳文を確認・訂正できるので、安心感を与えることができる。また、中国語や英語を通して日本語を客観的に見つめることで、今まで気づかなかったことや、分かったようで実は分かっていなかったことに気づくことができる。

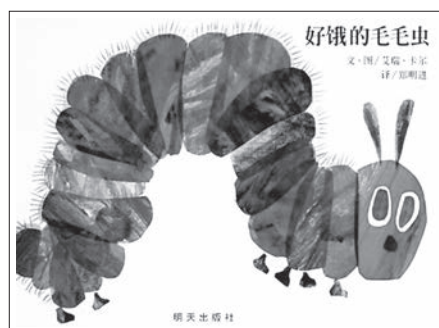


図1 『はらぺこあおむし』の中国語版

三つ目は、この教材は、中国語と日本語を比較する上で多くのヒントを与えてくれるからである。例えば「**毛**虫（あおむし）」「**棒**糖（ペロペロキャンディー）」「**小**的（小さな）」のように、同字反復（**しやうご**）の言葉が多い。日本語にも「**燦**々」「**黙**々」「**悠**々」「**徐**々」「**早**々」「**淡**々」など状態を表す疊語が多く用いられている。中国語と日本語を比較することで、日本語と中国語の繋がりや、日本語のルーツ、日本語の特質に対する理解を深めることが期待できる。

### 3-2 授業実施の概要

今回の授業はTT（チームティーチング）形式で行った。実施校教員の石井明子は授業の説明や発問、指示を含め全体の指導を担い、講師の李軍は中国語の音読、活動中のヒントの提示、学習者の質問への回答、日中漢字の相違と繋がりに関する説明などを行った。

【単元名】特別授業—中国語版・英語版『はらぺこあおむし』から日本語を見つめよう

【単元の指導目標】

- ① 1学期・2学期に行った英語との連携を踏まえ、中国語も扱うことで複言語・複文化に触れる。
- ② 中国語の漢字や発音に親しみ、日本語以外の言語にも興味を持つ。
- ③ 日本語の既有知識を中国語理解に活かしながら、中国語を日本語に翻訳する。
- ④ 日中両言語比較、日中漢字比較を通して、日本語の特質に対する認識や理解を深める。

【評価規準】

- ① 中国語の漢字に興味を持ち、中国語の漢字から意味を推測したり、英語版を通して訳を訂正したりすることができる。【関心・意欲・態度】
- ② 話し合いに積極的に参加し、自分の考えを分かりやすく伝えたり、他者の意見や感想を的確に聞き取ったりすることで、自分の考えを広げ深めようとする。【話す・聞く能力】
- ③ 絵本に描かれている物語を読み取ることができる。【読む能力】
- ④ 漢字を含む日本語の特質に関する基礎知識を身に付けている。【言語についての知識・理解・技能】

【授業の展開】

- ① 講師の紹介。
- ② 使用教材とワークシートの配布。（ワークシートの一部は本稿の最後に示す。）
- ③ 講師による中国語での本文朗読。
- ④ 5,6名の班を作り、絵本を前半部分（ワークシート①～⑩）と後半部分（⑪～⑯）に分け、それぞれ担当する班を割り当てる。
- ⑤ 各班で担当部分の中国語を日本語に翻訳する。教員たちは巡回指導を行い、質問に答えたりヒントを与えたりする。
- ⑥ 翻訳が完了した班に『はらぺこあおむし』の英語版を配布する。学習者は訳文を確認・訂正する。

- ⑦ 各班の代表者が担当箇所の訳文を発表する。
- ⑧ 訳文を確認した後、各班で中国語の漢字と日本語の漢字を比較する。
- ⑨ 班ごとに意見交換を行い、各班でまとめた意見をクラス全体で発表する。
- ⑩ 各班の発表内容を踏まえつつ、講師が日中漢字の相違やそれぞれの特徴、日本語の特質について説明する。
- ⑪ アンケートと感想プリントの配布、記入。
- ⑫ 授業の総括。

#### 4 授業の実際と分析—ワークシートの記述内容に即して

漢文以外に、中国語の学習材を用いた授業は初めてで、しかも普段中国語に接する機会もそれほど多くないので、絵本の中国語を日本語に翻訳する作業の最初は、「難しい」「分からない」と呟く学習者も複数いた。しかし、多くの学習者は幼少期に『はらぺこあおむし』を読んだことがあり、活動開始後は、楽しそうに学習活動に取り組む学習者が多く見受けられた。（図2）



図2 翻訳活動の様子

本章では、ワークシートに書かれた日本語訳文、日中漢字比較に関する記述、感想文の内容、授業後に実施したアンケート調査の結果などを示しつつ、本実践の成果と課題を分析・考察する。

##### 4-1 中国語・日本語・英語の比較から日本語の特質を見つめる

授業中に配布したワークシートには、絵本の各頁の絵と日本語漢字に変換した中国語が提示されている（本稿末の【資料】を参照）。中国語をできるだけ日本語漢字に変換したが、中国語にあって日本語にない漢字も使われているので、すべての中国語を日本語漢字に変えることはできなかった。しかし、例えば「毛毛虫（あおむし）」「月光下（月光の下）」「暖和的太陽昇起来了（暖かい太陽が昇ってきた）」「兩個梨（二個の梨）」「四個草莓（四つの苺）」のように、漢字から大体の意味を読み取れる箇所が多いので、すべての漢字や中国語が分からなくてもある程度翻訳できる。一方で、「苹果（りんご）」「蛋糕（ケーキ）」「冰淇淋（アイスクリーム）」のような日本語にはない漢字の使用や、「覺得舒服多了（気分がだいぶ良くなった）」のように文法が難しい箇所もあるので、絵を見て内容を推測したり以前絵本を読んだ時の記憶を辿ったり班員と話し合ったりクイズ感覚で意味を当てたり、巡回指導の先生に聞いたりするように促した。このように、中国語を日本語に翻訳する活動では、幾つかの壁がある。しかし、この活動は中国語を完璧に日本語に訳すことを目的としているのではなく、日本語の漢字知識や言語感覚を中国語理解に活かすという「言語感覚の活用」を目的としているので、活動を通して、少しでも発見や気づきが得られれば評価するように心がけた。

以下に、絵本の同じ部分の英語版原文、中国語版そして学習者による日本語訳文を示し、三つの言語を比較しながら日本語の特質について考える。なお、分析対象となる箇所は波線で示し、日本語訳文はワークシートに書かれた代表的な回答を引用する。

ワークシート における番号	英語版 (原文)	中国語版	学習者による 日本語訳文
⑥	On <u>Monday</u> he ate through one apple. But he was still <u>hungry</u>	星期一, 它吃了一個蘋果。 可是, 肚子還是好餓。	月曜日, あおむしはりんごを一個食べた。しかし, お腹は <u>ぺこぺこ</u> 。
⑪	On <u>Saturday</u> he ate through one piece of <u>chocolate</u> cake, one ice-cream cone, one pickle, one slice of Swiss cheese, one slice of salami,	星期六, 它吃了 一塊巧克力蛋糕 一個冰淇淋甜筒 一條腌黃瓜 一塊奶酪 一截火腿	土曜日, あおむしは, <u>チョコレートケーキ</u> , アイスクリーム, ピクルス, チーズ, サラミ,
⑫	one <u>lollipop</u> , one piece of cherry pie, one <u>sausage</u> , one <u>cupcake</u> , and one slice of watermelon.	一根棒棒糖 一塊櫻桃派 一條香腸 一個紙杯蛋糕和一片西瓜。	<u>ペロペロキャンディー</u> , さくら んぼパイ, <u>ソーセージ</u> , <u>カップケーキ</u> とスイカを食 べた。
⑮	He built a small house, called a <u>cocoon</u> , around himself.	它造了一間小房子, 叫做 “繭”, 把自己包在裡頭。	[訳文A] あおむしは自分の周りに小さな家“まゆ”をつくり(以下略) [訳文B] 彼は <u>さなぎ</u> と呼ばれる小さな家を自身の周りにつくり(以下略)

#### 4-1-1 「星期」と「曜日」

翻訳活動中に巡回指導を行ったところ、よく聞かれたのは「星期」の意味であった。学習者は翻訳完了後に英語版を通じて、「星期」は「曜日」のことを指すことが分かったが、納得いかない学習者もいた。そこで、実は「星期」と「曜日」が繋がっていることを伝えたと、多くの学習者が興味を示してくれた。授業の後半に、学習者とともに中国語の「星期～」と日本語の「～曜日」の関係について考えることにした。

『大漢和辞典』では、【曜】の意味について「㊟かがやく。ひかる。㊞あきらか。㊟ひかり。㊠日・月・五星。〔素問、天元紀大論〕七曜周旋。〔注〕七曜、謂之日月五星。(後略)」と記されている。㊠項にある「日・月・五星」に注目したい。ここで言う「五星」は「五行説<sup>12</sup>」における「歳星(木星)」「熒惑(火星)」「鎮星(土星)」「太白(金星)」「辰星(水星)」を指している。

平安時代に漢訳仏典の伝来とともに、「七曜」という概念が中国から日本に伝えられた。が、ほとんどの学者はそれをただ吉凶の判断をするための暦法の一つとして扱い、近代の時間概念ではないと主張している<sup>13</sup>。これを受けて、徐克偉は、日本の近世以降の蘭学資料における翻訳語を中心に、「七曜日」における伝統から近代への転化過程を探り、その軌跡を明らかにした上で、次のように指摘し

ている。

現在使われている「七曜日」、「～曜日」などの言い方は単純な訳語ではなく、伝統的な七曜（直日）などの言い方の上に、様々な学者によって改変された言葉であると思われる。その過程では、ポルトガル語を始め、ユダヤ・キリスト教による名称が一時取り入れられたが、その後は断絶してしまった。蘭学者は主に北欧神話による七曜日の語彙に向かうが、訳語を定めた際、語源にはあまり触れず、ラテン語、天文・占星学（暦学）、日中両国の伝統文化にある七曜の知識を利用していただけと考えられる。<sup>14</sup>

この指摘から分かるように、いま私たちが使っている「～曜日」の背後には、中国をはじめ、諸外国の文化の流入や、様々な学問や言語の関与、そして日本の蘭学者、翻訳者たちのたゆまぬ努力があった。現代中国語の曜日の名称には「星」だけが残され、そこからは「日・月・五星」という歴史の痕跡を探ることが難しくなったが、日本語の「七曜日」にはその歴史ドラマがまだ色濃く残っている。なぜ曜日の名称に自然界の物質や星の名前が付いているのか、その言葉のルーツを考えることで、問題意識を持って日本語を見つめ直し、伝統的な言語文化に興味を持つきっかけになり得る。

#### 4-1-2 「餓」と「ぺこぺこ」「べっこべっこ」

表中⑥にある「hungry」の中国語訳「餓」と日本語訳「ぺこぺこ」を見てみよう。多くの学習者は「餓」を「お腹がすいた」と訳すのではなく、「ぺこぺこ」と訳している。その理由としては、絵本のタイトル「はらぺこあおむし」から影響を受けた、幼少期に読んだ時の記憶に基づいて訳した、などを挙げることができるが、「ぺこぺこ」という擬態語のほうが、「お腹がすいている」状態をより分かりやすく生き生きと表現し、幼児向けの絵本にふさわしいと考えていたのかもしれない。

日本語のオノマトベ（擬音語と擬態語の総称）は、ほかの言語と比べると圧倒的に数が多い。日本語オノマトベ研究の第一人者・小野正弘は、「オノマトベは日本語の根源である」とした上で、オノマトベの特性について次のように述べている。

言葉のおおもととなるようなもの。言葉の発せられる現場で、口伝えに受け継がれてきたもの。肉体感覚や心の感覚を表わそうとしたとき、ないと困るもの。ふだんはよく認識して使っているわけではないけれども、よくよく思いを巡らせてみると、自分たちの用いている日本語の中に深く根を下ろしているもの——これなのではないだろうか。<sup>15</sup>

文字を持たなかった日本では、奈良時代に漢字を受け入れ、それ以降万葉仮名、平仮名、カタカナを誕生させ、文字で日本語を記録するようになった。奈良時代からの書き言葉の歴史は1400年くらいであるのに対し、話し言葉だけの言語生活のほうが遥かに長かった<sup>16</sup>。その長い話し言葉の言語生活の中で、おびただしいオノマトベが生み出され、今日の日本語にも多大な影響を与えていると考えられる。オノマトベは日本語の歴史を背負いながら、いまなお日本語の特質として受け継がれている。

星野和子は、「一般に言語はその語の表す意味と語音との間には何の関係もないが、擬態語の場合は語の意味と音との間にある程度の結びつきがある」と指摘し、「人間の感性経験には共感覚

(synaesthesia) と呼ばれる現象があり、聴覚、視覚、触覚、味覚など感覚相互の間に緊密な照応関係のあることが心理学の分野では認められているという。そのために明暗、大小、鋭鈍、粗忽などの視覚的・触覚的な領域も語音として聴覚的に捉えて表現できるのであり、その表現の一定の型が見られるのである」と説明している<sup>17</sup>。オノマトペは、語形や音の清濁、語尾の変化によって、繊細かつ微妙に異なる音声や状態を表すことができる。例えば、「からから」「がらがら」という「ABAB」の語形によって音声や状態の連続を表し、「からから／清音→軽い」、「がらがら／濁音→重たい」といったように音の清濁によって物体の重さの相違を区別している。また、「からっ／促音→瞬時停止」「からり／「り」→こもる・まとまる」「からん／撥音→響く・はねる」などのように、語尾の形によって、物事のような状態を感覚的に捉えることができる<sup>18</sup>。

「ぺこぺこ」は「へこむ(凹む)」という言葉から由来し、「へこ」から「ぺこ」へ、そして「ぺこぺこ」という語形によって、「お腹がすいている」状態の連続を表している。さらに、「ぺっこぺっこ」という語形にすることで、「お腹がすいている」状態を強調している。学習者の訳文にも、「餓」を「ぺっこぺっこ」に訳したものが複数見られた。

このように、自由自在に語形を変えたり、その語形の違いによって意味や感覚の僅差を表したりすることができるのは日本語のオノマトペだけであるといっても過言ではない。中国語を日本語に訳す学習活動の中で、「ぺこぺこ」「ペロペロ」などのオノマトペに焦点を当てることで、日本語の特質に対する理解や認識を深めさせることができる。また、普段無意識に使っているオノマトペや漫画などに出ているオノマトペはどのような表現効果があるのかについて、今後の課題として追究するという発展学習も考えられる。

#### 4-1-3 「cocoon」と「繭」と「さなぎ」

表中⑮にある「cocoon」の中国語訳「繭」と日本語訳「まゆ」「さなぎ」について考える。

『ジーニアス英和大辞典』では、「cocoon」の意味を「(チョウ・ガの幼虫、特にカイコの) 繭《中にさなぎ(pupa) が包まれている》」と説明しており、「繭(幼虫の外側の殻状のもの)」と「さなぎ(包まれている幼虫)」の区別も示している。一方、中国語においても、カイコなどの幼虫を包む殻状のものを「繭(まゆ)」、「包まれている幼虫」を「蛹(さなぎ)」として区別している。ところが、日本語の場合、カイコの幼虫なら、外側の殻を「繭(糸状の粘質分泌物で作られた覆い)」、「繭」の中の幼虫を「さなぎ」というが、カイコのような繭をつくらぬ幼虫はその殻と中の幼虫を包めて「さなぎ」という。「あおむし」が造った「部屋」は「繭」ではないのに、なぜ「まゆ」に訳されたのか。

訳文Aの「まゆ」は中国語の漢字「繭」から影響を受けたのかもしれない。訳文Bの「さなぎ」は英語と中国語の意味に囚われず、日本語の使い方に基づいて訳されたと考えられる。ここでは、すぐに訳文Aを否定し、訳文Bを評価するのではなく、どこに問題があるのか、問題意識を持たせた上で、言葉や文章について吟味させることが大事である。例えば、訳文Bの「さなぎと呼ばれる小さな家を自身の周りにつくり」と、日本語版『はらぺこあおむし』(森比左志訳、1976)の訳文「まもなく あおむしは さなぎになって……」とを提示し、どちらの訳文が日本語としてよりふさわし



いかについて考えさせたり議論させたりすることで、学習者の言語感覚を磨くことができる。

#### 4-1-4 外来語の日中訳語

表中⑪, ⑫にある様々な食べ物の日中訳語を見ると、日本語の訳語はほとんど英語の発音をそのままカタカナで表記する、いわゆる音訳語であるが、中国語の訳語は「棒棒糖 (ペロペロキャンディー)」「香腸 (ソーセージ)」「紙杯蛋糕 (カップケーキ)」のように意識語が多く、表意文字である漢字の特徴が見てとれる。ただし、「巧克力 (チョコレート, 中国語の発音は *qiǎokèlì*)」のように漢字の意味と関係なく当て字で外来語を表記するものもあり、日本語の「亜細亜」「天婦羅」「珈琲」「浪漫」といった当て字による外来語表記と類似している。

このような相違を踏まえた上で、なぜ日本語は平仮名、カタカナ、漢字を併用しているのかを問いかけた。学習者の回答を聞いた後に、日本語の歴史を説明しながら、前述の平仮名によるオノマトペの創出、カタカナによる外来語表記、漢字による意味伝達という日本語の特質について再認識させた。

以上、ワークシートの課題1「中国語の本文から日本語の訳を考えてみよう」と課題2「英語版の原文から課題1で訳した内容が適切かどうかを確認してみよう」の結果に基づき、分析を行った。次節では、課題3「中国語の漢字と日本語の漢字を比較して気づいたことをまとめよう。班の人と意見交換をしよう」の回答について分析する。

## 4-2 日中漢字比較

学習者が日中漢字比較について記した内容は、下記のように分類することができる。

### A 漢字の特徴について記したもの

- 「啊 (あっ!)」などのように音を表す字は口偏が付く。
- 「嫩 (若い, 柔らかい)」のように日本にはない部首同士の組み合わせがある。
- 「蝴 (チョウ)」など日本語より複雑な漢字がある。
- 「了 (完了の意)」や「餓 (空腹の意)」のように漢字から意味が推測できるものもあるが、全く違う意味の漢字もある。
- 同じ漢字でも発音が全く違う。

### B 語彙の特徴について記したもの

- 「毛毛虫」「棒棒糖」「妹妹」など同じ漢字を繰り返している語が多い。
- 「星期一 (月曜日)」など曜日の表現の仕方が違う。

### C 中国語と日本語の比較について記したもの

- 中国語はすべて漢字なので、一文字一文字に意味がある。
- 中国語には平仮名がないので接続が難しい。

中国語の簡体字を日本語の字体に変えたことは、日中漢字を比較する上で一つの大きな相違点をなくすことを意味するが、中国語が分からない学習者に中国語の意味を読み取らせるためにやむを得ない選択であった。今回の学習者の回答には、日中漢字字体の相違 (簡体字と繁体字) に関する記述は

なかったが、本来ならば中国語は異なる字体が使われていることを事前に説明しておいた。

表意文字の漢字は平仮名とカタカナといった表音文字と比べると、表音の機能が弱い。そのため、擬音語や感嘆語などを表す時に、「口偏+音符（漢字の表音部分）」という構成の漢字が多く作られた。上記Aの「音を表す字は口偏が付く」という指摘は、中国語の特徴を見事に言い当てている。また、Bの「同じ漢字を繰り返している語が多い」、「曜日の表現の仕方が違う」の意見が最も多かった。これらの気づきは初めて中国語版を読む日本人にとって一番分かりやすい違いだったのかもしれない。曜日の表現の相違についてはすでに4-1-1節で述べた通りである。ここでは、「同字反復（以下、疊語）」の語彙について考える。

中国語における疊語には「年年」「家家」「人人」のような名詞もあれば、「徐徐」「早早」「淡淡」「悠悠」「悶悶」のように状態を表す副詞もある。これらの疊語は日本に伝わってきて、日本語として今も使われている（日本語の場合は「年々」「家々」「人々」「徐々」「早々」「淡々」と表記されている）。さらに、日本では、中国語の疊語を受け入れただけでなく、「生々→生き生き」「伸々→伸び伸び」「晴々→晴れ晴れ」のように、漢字を訓読みで読ませ日本製の疊語を多く生み出していった<sup>19</sup>。こういった日中言語の相違について考えることで、日本語と中国語の奥深い繋がりに気づき、中国語の漢字・漢語の流入やそれらが和語と融合し日本語として定着していった経緯を理解することができる。実際に、次のような記述が複数見られた。

自分の意見

物のかたえ方の単位が同じものも違うものもある。  
日本語でいう「だんだん」や「ますます」と同じように中国語でも2回くりかえしている言葉がある。

上記のほかに、日中漢字の相違に興味を持ったといった記述も見られた。

自分の意見

「又」や「一個」、「箇」など日本語と同じようなところが多く、比較的読むことができたと思う。だが、「星期六」など英語片仮も読むまで「6日」という意味だと思ったのだが、「土曜日」を表していた。このようにところどころわからないところがあつたのも面白いなと思った。

なぜ「星期六」を「6日目」だと推測したのか。それは、「星期六」という漢字から何らかのヒントを得たに違いない。このように、日本語の既有知識を活かしながら初めて見る中国語の意味を捉えていく力は、まさにメタ言語能力に近いもので、本実践が目指した「言語感覚の活用」そのものである。

### 4-3 授業の感想

学習者が書いた授業の感想を以下に示す。

[感想文 1]

今まで外国語といえば「英語くらいしか聞いたことか無かった」ので、初めてほの中国語を聞いて言語により雰囲気も全然違うということが分かった。  
『ほらここにおもしろい』は日本語でも英語でも読んだことがあって、中国語で読んでみるとそれぞれの言語の特徴がよく分かってとても面白かった。

[感想文 2]

日本語と中国語の似ているところや違うところを学習でき良かった。星期について知ることができてとても驚いた。「私」など読み方が似ているものもあり中国語に関心をもつことができた。ひらがなやカタカナができた理由もわかり日本語というものの奥深さを感じることもできた。いい機会だった。

[感想文 3]

ただ「アルファベットを並べているだけの英語やフランス語と違い、中国語は漢字一字一字に込められた意味を覚えることで文章の内容が少しはわかった」のでとても楽しかった。  
また、平仮名、片仮名、漢字をいり混ぜている日本語はとても便利だと改めて知った。

[感想文 4]

日本語は古代の中国語をまねてつくられたこともあり、日本語と中国語が似ていると思いました。また、中国語の発音なりたうを聞いて、とても興味深いのと感じました。今回のような授業を受けたら初めて、1番楽しかったです。また、受けたら思いました。

[感想文 5]

中国語は英語とは違って、習っていないけど何となく意味が分かったので面白かった。  
日本と中国が深く関わっているのだからと感じた。

[感想文 6]

今まで未知の世界だった中国語について知ることができてとても楽しかったです。面白いイメージしか中国語はなかったことがなく、始めのときは「少しビビりましたが」も読んでみると日本語の漢字と似た意味があり、とても面白かったです！

[感想文 1]にある中国語の絵本を読むことで日本語・中国語・英語の特徴が分かった記述や、[感想文 2][感想文 4]にある中国語と日本語に興味を持った記述、[感想文 3][感想文 5]にある「英語やフランス語と違い、漢字だからこそ中国語の意味が分かった」という記述からは、今回の連携授業の効果が見てとれる。今回の授業を通して、学習者は漢字という日中両言語を結びつける架け橋の存在に気づき、漢字を含む日本語の特質を再認識することができた。また、「日本と中国が深く関わっている」「平仮名やカタカナの由来」といった伝統的な言語文化に触れる機会にもなった。

一方、「漢字だらけで難しかった」「分からなかった」という記述も複数見られたが、[感想文 6]のように、最初は苦手意識を持っていたが楽しく活動に参加できた学習者や[感想文 1]～[感想文 5]のように「楽しかった」「面白かった」と感じた学習者が圧倒的に多かった。

#### 4-4 評価

ワークシートの最後に「自己評価」の項目を設けている。その内容は次の通りである。

- |                              |    |     |
|------------------------------|----|-----|
| 1 班員と十分に話し合うことができた。          | はい | いいえ |
| 2 中国語の漢字から日本語の意味を推測することができた。 | はい | いいえ |
| 3 1・2から適切な日本語に訳すことができた。      | はい | いいえ |

「自己評価」に加えて、本授業の【評価規準】に照らして、次の評価ポイントも設けた。

- ① 中国語の漢字から意味を推測し訳文が作れていたか。
- ② 英語版を確認したうえで、訳文を直していたか。
- ③ 日中漢字比較を真剣に考えていたか。
- ④ 話し合いに積極的に参加していたか。

「自己評価」に関しては、1, 2, 3のどれも「はい」と答えた学習者は9割以上であった。評価ポイント①～④に関しては、学習者が書いた訳文、日中漢字比較に関する記述やグループ活動の様子はもちろん、どのような経緯で訳文を作ったかも評価の対象とした。例えば、ワークシート⑧にある「星期三、它吃了三個李子。(水曜日、あおむしはすももを三つ食べた。)」の「李子」から「すもも」を導き出す際に、漢文の授業で学習した「桃李言はざれども下自ずから蹊を成す」からヒントを得たのか、それとも辞書で調べて訳したのか、あるいは英語版で確認して「すもも」に辿り着いたのかといった経緯を評価の対象とした。既有知識を活かして翻訳した学習者を高く評価するように心がけた。

#### 4-5 年間実施の連携授業に対するアンケート調査の結果と感想

授業後に、継続的な連携授業を受けた学習者に対して一年間を振り返るアンケートを実施し、年間指導に関する感想を書かせた。アンケートの結果は次の通りである。なお、学習者160名のうち143名がアンケートを提出した。

- 1 英語と日本語を一緒に扱う授業が楽しかった。  
はい 140名    いいえ 2名    どちらでもない 1名
- 2 英語と日本語を比較することで、日本語の特徴に気づけた。  
はい 141名    いいえ 2名    どちらでもない 0名
- 3 英語以外に、中国語も扱うことで、外国語＝英語だけではないと気づいた。  
はい 137名    いいえ 6名<sup>20</sup>    どちらでもない 0名
- 4 中国語の漢字と発音に興味を湧いた。  
はい 123名    いいえ 19名    どちらでもない 1名
- 5 外国語との比較を通じて、日本語に対する意識が変わった。  
はい 131名    いいえ 10名    どちらでもない 2名
- 6 学んだことを忘れずに、これからも日本語を適切に使おうと思う。  
はい 140名    いいえ 2名    どちらでもない 1名

「4 中国語の漢字と発音に興味を湧いた」について、19名の学習者が「いいえ」と答えたのは、中国語の発音が難しかったのであろう。それ以外の項目はどれも9割以上の学習者が「はい」と答えている。この調査結果からは、学習者が一年間の連携授業を好意的に受け止めていることが窺える。

一方、年間指導に関する感想文の内容は4-3節で示した今回の授業の感想と類似したものが多く見られたが、中国語だけでなく、英語を含む外国語との連携授業に対する思いを綴ったものも少なくなかった。以下の感想文を参照されたい。

- A 外国語をやると、日本語との共通点、相違点がやはりそれぞれあった。外国語と日本語を比べることで、今までとくに考えたこともなかった日本語の特徴が見えてきて、とてもおもしろかった。また、外国語は英語しか触れていなかったの、他の言語にも触れられてよかった。またやりたいと思った。
- B 普段ならばここまで詳しく学ぶことはあまり無いと思うが、国語の授業で学ぶ機会があって良かった。他の言語にもどんどん触れてみたいと思った。

上記の感想で示したように、学習者はこの一年間の連携授業の中で、英語や中国語といった複言語・複文化に接したり考えたりすることで日本語の特徴に対する認識を深めることができた。また、英語や中国語以外の言語にも触れていきたいという学習意欲が湧いてきたことも見てとれる。

#### 4-6 成果と課題

これまでの分析を踏まえ、今回の授業実践の成果として以下の五つを挙げることができる。

一点目は、中国語や中国語の漢字という視点から、普段あたりまえに使っている日本語を見つめ直すことで、日本語の特質や伝統的な言語文化に対する理解を深めることができたことである。

二点目は、日本語の既有知識を未知の中国語理解に活かし、メタ言語能力を鍛え、言語感覚を磨くことができたことである。

三点目は、中国語の漢字と日本語の漢字を比較することで、日中両言語の繋がりに気づき、漢字の特徴（表意表音性）や面白さを感じながら日本語や中国語に興味を持つようになったことである。

四点目は、助詞や語尾変化などを持たず、漢字のみで構成されている中国語に接することで、日本語の文法や文字体系の豊富さ、便利さを改めて感じる事ができたことである。

五点目は、中国語や英語といった複言語・複文化に触れることで、日本語以外の言語にも興味を持つようになったことである。今回の授業はこれで終わるのではなく、今後の複言語・複文化理解の出发点となったことは大きな成果の一つと言える。

上記のほかに、学習者が幼少期に慣れ親しんでいた絵本『はらぺこあおむし』を教材にしたことで、日頃あまり触れたことのない中国語を扱う本実践においても、多くの学習者が苦手意識を持たずに取り組み、楽しく授業に参加できたことも付け加えたい。

以上分析した通り、本実践で掲げた四つの目標はほぼ達成されたと言えよう。しかし、課題も幾つか残っている。まず、1時間の授業で、中国語から日本語への翻訳、英語版の確認、日中漢字の比較、

各班の意見交換や講師による説明など多くの内容を盛り込んだため、時間的余裕がなく、慌しい展開となった。また、『はらぺこあおむし』を教材として使っていたものの、絵本の中国語、とりわけ漢字の特徴に焦点を当てたため、この絵本の良さを十分に活かしていない点も反省すべきである。さらに、今回の授業は2学期と3学期の連携授業の内容との繋がりがほとんどなく、特に2学期に目標とした「言語感覚や表現力の育成」を3学期の活動に関連させることができなかったため、次年度に学習活動を計画する際に再考する必要がある。

## 5 国語科教育における中国語教材導入の可能性と広がり

国語科授業を構想する際に、往々にして「国語」という枠の中で教材開発や授業づくりを考えがちである。しかし、「国語」という枠を越えて外側（外国語）から国語（日本語）を見つめ直す時に、それまでに気づかなかったことや見えなかった景色が見えてくることが多々ある。

例えば、漢字はどのような特徴を持ち、どのような法則性があるのか、「月曜日」「火曜日」の「月」「火」は何を表しているのか、「ぺこぺこ」はどのようにできた言葉なのか、といったような質問を学習者に問いかけても、中学生どころか、大人でもなかなか答えられないであろう。あるいは、これらの問題はあたりまえ過ぎて、最初から軽視されてしまう可能性もある。ところが、『はらぺこあおむし』の中国語版を日本語に翻訳する活動では、中国語という視点から日本語を対象化して意識的に捉えることで、自ずと上記のような疑問が生まれ、改めて日本語のルーツを考えることができた。

浜本純逸は、国語科教育の学習材の条件として、「言語生活力を育てる」「言語について意識化させる」「言語の法則を学ばせる」の三つを挙げている<sup>21</sup>。『はらぺこあおむし』の中国語版は、学習者に日本語の漢字や日本語という言語を意識化させ、中国語と日本語の法則を見出させることができた。それだけではない。中国語と日本語を比較することで、両言語に興味・関心を持つようになった点においても、日本語の根底に漢字文化の源流が流れており、いまでも脈々と受け継がれていることを理解した点においても、中国語をきっかけにほかの言語にも触れていきたいという意識変化においても、中国語教材の可能性と広がりを感じることができる。

中国語教材を国語科授業に導入するには、中国語既習者や中国語母語話者の参加が望ましい。しかしながら、学習材の活用方法や目標設定、授業展開などを工夫することで、中国語ができなくても実施可能と思われる。

最近、「偽中国語研究会」が話題を呼んでいる。「偽中国語」とは、日本語でコミュニケーションを行う際に、平仮名や片仮名を取り除き、漢字だけで文章を書いたものをいう。例えば、「偽中国語我参加。結構難。然非常楽。」といったように漢字だけで日本語の文章を書けるのは、漢字ならではの為せる技である<sup>22</sup>。「偽中国語」はあくまでも日本語の変形で、本物の中国語とは異なる。しかし、非日本語学習者の中国人から見ても何となく意味を理解できるところは興味深い。漢字のみで日本語を表記する歴史は奈良時代や平安時代に遡る。法隆寺金堂薬師仏の「光背銘」に刻まれているのは日本最古の文章とされ、漢字のみで書かれた和式漢文である。

このように、歴史上でも現代においても、日本語と中国語は漢字という深く強い絆で繋がっている。漢詩漢文だけでなく、今日の学習者に興味・関心を持たせるような中国語教材を開発し、それらを国語科授業に活用していくことは、大きな意味を持っている。

## 6 総括と今後の展望

2017年版小・中学校学習指導要領、2018年版高等学校学習指導要領の改訂ポイントとして、「主体的・対話的で深い学び」が注目されている。「深い学び」については、新学習指導要領では「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりする」と解説されている。今回の連携授業では、「既有知識を活かしながら中国語を翻訳する→日中漢字比較→問題発見・分析→日本語の見直し→気づき・発見」という学習過程において、「深い学び」の実現を試みた。

中国語教材を国語科授業に導入・活用する取り組みはまだ少なく、しかも漢文指導の一環として位置づけられるものがほとんどである。しかし、今回の連携授業のように、中国語教材は多くの可能性を内包している。今後も中国語教材を含む効果的な学習材を発掘し、国語科授業の活性化を図ってきたい。

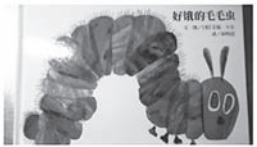






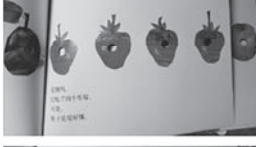


### 【注】

- 1 総務省 (2004) 「平成 15 年『通信利用動向調査』の結果」による。  
[www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/040414\\_1.pdf](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/040414_1.pdf)
- 2 注 1 に同じ。
- 3 大崎素史・矢島伸男 (2011) 「教師のコミュニケーション能力と笑いの効果に関する一考察」(創価大学教育学論集第 62 号)。なお、この論文で 2007 年 5 月 1 日の産経新聞掲載の独立行政法人メディア教育開発センターが 2004 年度に実施した「日本語力テスト」結果を踏まえ、大学生 (国立大生の 6%、私立大生の 20%、短大生の 35%) の日本語基礎力が中学生レベルであった点に言及している。
- 4 小森茂 (2015) 「国語教育と英語教育との連携を推進する～母国語教育と他言語教育との連携の在り方～」(鳥飼玖美子ほか「自律した学習者を育てる英語教育の探求 (7) —小中高大を接続することばの教育として—」  
[www.chu-ken.jp/pdf/kanko83.pdf](http://www.chu-ken.jp/pdf/kanko83.pdf))
- 5 榎木貴之 (2017) 「英語教育に生きる国語の力とは—国語教育と英語教育の連携を目指して—」(『月刊国語教育研究』2017 年 3 月号)
- 6 詳細は石井明子 (2018) 「英語科との連携による『深い学び』実現に向けた学習過程—俳句と HAIKU を用いた授業実践を踏まえて—」(『月刊国語教育研究』2018 年 5 月号) や「英語教材を用いた中等二年「国語」実践—『The giving tree』の翻訳と『おおきな木』との比較を通じて—」(第 135 回全国大学国語教育学会大会要旨集) 等を参照されたい。
- 7 大山は、「複言語主義」を「運用能力レベルが様々であるような複数の言語を、多様な目的のために使うことができる潜在的な、あるいは現実の能力」と定義している。あくまでも複言語主義は話者個人の持つ能力として捉えており、地理的な領域において複数の言語が存在していることを指す多言語主義とは区別している。(大山万容 (2016) 『言語への目覚め活動 複言語主義に基づく教授法』くろしお出版) なお、本実践では「個人の複言語・複文化能力を発達させることを意図した言語教育」を「複言語教育」と呼ぶ大山の考えに倣い、

- 複言語と複文化をセットにして「複言語・複文化」と呼び、各個人が持つ母語言語能力を日本語や英語以外の言語に対しても活用していくことを目指している。
- 8 大山が携わった公立小学校第6学年では、日本で出会う可能性が高いベトナム語、中国語、韓国語、英語、スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語を用い、月の名前がカタカナだけで書かれたカードを言語ごとに分類させる実践を行っている（注7に同じ）。他にも岩坂泰子・吉村雅仁は国立大学附属小学校で多くの言語の月の名前を活用した「言語への目覚め活動」を実践している。（岩坂泰子・吉村雅仁（2015）『「言語意識」と『多様性に対する寛容な態度』の育成に向けたことばの教育：奈良教育大学附属小学校における『言語・文化』授業』、奈良教育大学『次世代教員養成センター研究紀要』第1巻）
  - 9 『新明説漢文』（全国高等学校国語教育研究連合会、尚文出版、2013）12頁に「我花を見る」「我見花」「I see flowers.」を例に挙げ、日本語と漢文（中国語）、英語の語順の違いを示している。
  - 10 在籍は各クラス40名ずつの160名であるが、本授業時に欠席者がいた。なお、中国人学習者が1名いるが、中国語の理解度はほかの日本人学習者とさほど変わらなかった。
  - 11 大津は、「メタ言語能力」を「言語を客体化された対象として捉え、その構造と機能についての知識を利用しながら、言語の運用を行う力」と定義している。（大津由紀雄（2010）『言語教育の構想』、田尻英三・大津由紀雄編『言語政策を問う！』ひつじ書房）なお、石井は2学期までの実践でも大津のメタ言語能力を参考にしており、特に1学期はその能力の育成を授業のねらいとしていた。本実践では、メタ言語能力を「言語の運用」に活かすのではなく、それを初めて接する中国語に活かすという意味での「言語感覚の活用」を目的にした。
  - 12 「五行説」は中国古代の自然哲学の思想で、自然も人間や社会も、木・火・土・金・水の五つの元素の一定の循環法則に従って変化するという説である。
  - 13 徐克偉（2016）『七曜日における伝統から近代への軌跡』（沈国威・内田慶市『関西大学東西学術研究所研究叢刊51 東アジア言語接触の研究』関西大学出版部）
  - 14 注13に同じ。
  - 15 小野正弘（2009）『オノマトベがあるから日本語は楽しい—擬音語・擬態語の豊かな世界』（平凡社）
  - 16 山口仲美（2006）『日本語の歴史』（岩波書店）
  - 17 星野和子（1993）『擬態語』（星野和子・丸山直子『日本語の表現』圭文社）
  - 18 この部分のオノマトベの用例とその説明は李軍（2016）『日中漢字文化をいかした漢字・語彙指導法—「覚える」から「考える」へ』（早稲田大学出版部）を参照されたい。また、日本語の擬音語と擬態語の同類語の音形態に共通する意味要素に関する説明は阿刀田稔子・星野和子（1993）『擬音語・擬態語使い方辞典』（創拓社）に基づいている。「同類語」とは、「からから」「がらがら」「からん」「からっ」「からり」のように、基本的な意味が共通で音形態が異なる語を指す。
  - 19 李軍（2018）『漢詩における疊語の擬態語を漢字・語彙指導に生かす』（堀誠『古典「漢文」の教材研究』学文社）
  - 20 このうち1名は「既に外国語は英語だけではないと思っていたから」と記述している。
  - 21 浜本純逸（2011）『国語科教育総論』（溪水社）
  - 22 「偽中国語研究会」の情報は同研究会のHP（<http://nisechina.com/>）を参照されたい。なお、本稿における「偽中国語」の定義と例示はこのHPによる。



【資料】 ワークシート (一部)

	<p>① 好饿的毛毛虫</p>		<p>⑥ 星期一，它吃了一个苹果。 可是，肚子还是好饿。</p>
	<p>② 献给 我的妹妹茉莉塔</p>		<p>⑦ 星期二，它吃了两个梨。 可是，肚子还是好饿。</p>
	<p>③ 月光下， 一颗小小的蛋躺在叶子上。</p>		<p>⑧ 星期三，它吃了三个李子。 可是，肚子还是好饿。</p>
	<p>④ 星期天早上，暖和的太陽昇起来了。“啾”一声，一条又小又饿的毛毛虫，从蛋里爬了出来。</p>		<p>⑨ 星期四，它吃了四个草莓。 可是，肚子还是好饿。</p>
	<p>⑤ 它要去找一些東西來吃。</p>		<p>⑩ 星期五，它吃了五个橘子。 可是，肚子还是好饿。</p>

Q 1 中国語の本文から日本語の訳を考えてみよう。

※ 前半を訳す班は①～⑩，後半を訳す班は⑪～⑯を訳し，訳文を中国語の下の〔 〕に書くこと。

Q 2 英語版の原文からQ 1で訳した内容が適切かどうかを確認してみよう。

Q 3 中国語の漢字と日本語の漢字を比較して気づいたことを下記にまとめよう。  
班の人と意見交換をしよう。

(注：ワークシートの後半の⑪～⑯は略す。絵の右側の中国語は日本語漢字に変換したものである。)